通信第三十号　　浄土の救い

　先日のおの時、私より少し年上のご主人が言われました「娘たちが二カップルで沖縄へダイビングに行っています。楽しいからお父さんも行こうと誘われましたがとてもいけませんよ」。帰りの車中で私はふと思わされました。「海中という別世界に入ることで、世間のつらい仕事の事や人間関係のわずらわしいことなどから離れられ、また仕事や育児をがんばろうと力が湧いてくるのだろうな」と、こういうかたちで若者も無意識に深くは浄土の世界を求めているのではないだろうか。

　最近、教誨師として少年院のご縁をいただき私が救われるご縁になっています。彼らはに落とされています。世間の価値からいえば落ちこぼれです。ところが出世間の仏法のみ心がスポンジが水を吸い込むように入っていきます。明るい顔になります。世間の価値でない世界に触れてお互いが仏様のみ心に包まれたような感じに成らされます。

　ある方から私は二度いわれました。「あなたは仏教を熱心に勉強しているのになぜ不幸なことが次々にあるのですか」正直なご意見です。世間の価値ではその通りです。実は私も長い間同じ考えでした。大石先生は京都大学出身であり、息子さんの三人はそれぞれ新聞記者、大学教授、商社マンとして活躍しておられます。大石先生にしたがって真剣に聞法していけばいくらなんでも世間生活がよくなっていくだろうという思いが私にはありました。ところが事実は逆でした。寺や子供たちが悪くなる一方でした。

あるとき、先生に尋ねました「先生の法話を聞いていったら、子どもたちの事や寺が良くなると思っていましたが、全然よく成りません。むしろ逆です」と、先生は驚いたようなお顔をされて「そんな聞き方をしていたのですか」先生の驚きに私が驚きました。「ええ、そうではないのか。誰もそういう聞き方をしているのではないのか」と。大石先生について聞法をはじめる前後から娘の不登校、家出。次男の問題行動で何回も学校から呼び出しがかかる。娘は大石先生の法話テープを投げました。愛情をもって育てたつもりでした。でも事実はちがっていたのです。大石先生のお教えを受けてから七年間がたった時、中学三年の娘に赤ちゃんが産れました。頭の中が真っ白になり、無意識に法兄の友松法純さんを訪ねました。部屋に入るなり「御院家さん何かのまちがいがあったのですかね。猫の子供が子をうんでいる。親の前では子供だが、向こうに行ったらちゃんと親に成っている」「誰にも言っていないのになぜ知っているのだろう」ドキッとしました。そして直感的に「如来様が猫に現れて見せてくれたな」と思わされました。産むも地獄、産まぬも地獄。私は決心させられました。しかし、産れる前後の数年は世間から隠れるようなみじめな生活をしました。地獄は覚悟していたつもりでも息をすることすらやっとのような日々でした。それでも、無心な赤ちゃんの笑顔は不安やあせりを吸い取ってくれました。そしてそこを本当に超えられたのはやはり大石先生のお育てでありました。先生がお亡くなりになられてからは朝参りでの大石先生の書信を輪読することによって不安心が消され浄土の菩提心が育てられました。

娘が家族を持ち四人の孫が出来、少し落ち着いた頃、次男、が平成二十五年に東京の寺で統合失調症（精神病）を発症しました。大学を退学したころは大石先生のご法座に参加していました。二時間正座をして前の方で真剣に聞いていました。大石先生はお念仏をすすめます。道人は口に念仏を称えています。先生は「道人君がお念仏を称えたら」といいます。そのお念仏は音声のお念仏ではないのですが道人も何が原因かわからず苦しく、人が自分から離れていくことがくあせっていたのでしょう。私たちも初めは発達障害だろうかと思い対応していました。先生は道人の事を大変にほめました。たしかに感性のよい感話もしました。あるとき私たち夫婦に「寺から出て行け、俺が寺をする」というのです。私は大石先生をみました。道人への憎しみも増していきました。道人は私の部屋だけでなく、庫裏全体を占拠してしまいました。被害妄想など症状が激しくなり予測不能な言動や行動が出て来ました。保健所や相談所にも何度も行きましたがマニュアル通りのアドバイスです。警察は現行犯でないと逮捕できません。病院は連れてきたら何とかします。と、出口が無くブラックホールの中に入ったような日々です。極端に言えばどちらかが死なないと解決はないという煩悩が湧いて来ます。テレビで見る事件は他人ごとではありませんでした。私たちに暴力をふるうようになりました。たよりの大石先生はすでにいません。理解できない行動が続くうちにとうとう本堂の阿弥陀様を隠してしまいました。そんな中でＮＨＫの「こころの時代」に出演された西川和栄先生とのご縁がありました。西川先生にご講師を頂いた法要を前に本堂の阿弥陀様が無くなりました。法要の日を変更することはできませんでした。急きょ大石先生の額入り名号をご本尊の場所に安置しました。西川先生は「かまへん、かまへん」といわれたことで私の心は不思議と落ち着かされました。満堂の参詣者の前で「これが本来の形です」と申し上げたら何事も無かったかのごとくすばらしいご法座が開かれました。その後、二男は僧籍を長仁寺から別の寺院へ移転することを条件に、阿弥陀様を元に返す事となりその手続きをしました。移転が終了した時点でご本尊はもどりましたが次に、聖人様の掛け軸等の仏具がなくなりました。本堂ががらんどうのようになりました。その時、私は息子が私のすることを邪魔するだけでなく、門徒さんに迷惑をかけ、仏様に反逆し寺を破滅させると思い、同行の渡辺さんがアドバイスして下さった移送サービスを利用して強制的に病院に入れることを決断しました。西川先生が電話の向こうから「お念仏してください。お念仏申せてか（お念仏を申せということか）と受けて下さい」とおおせられました。私は「お念仏申せてか、お念仏申せてか」と心に言い聞かせながら、肉体労働で汗をかいて一日一日を過ごしました。

息子は一年間の入院生活を終え、昨年の十二月からアパートで独り暮らしをするまでに快復しました。妻の法喜が週に一度は様子を見に行きます。私には顔を会わせたくないとのことで二年ちかく会っていません。アパートでは法喜が音読する先生のご文章を一日中聞いているようです。それがあるから法喜も別府のアパートまでいくのが苦にならないようです。感動した内容を聞くのが私も楽しみです。部屋には大石先生のご名号が掛けられています。

今思わせられるのは私の仏法への姿勢が問われていたということです。寺をとして受け入れ、稼業発展のために仏法を利用していたのです。全く出世間ではなくて出世間の言葉、道理を利用した野心であります。この事に気づけ、目覚めよと無意識的に息子は私にとって致命的な事件を起こしたのです。大石先生が「智慧ちゃんと道人君にもう少し苦労してもらわんとならんのかな」と言われた真意はそこにあったのです。あの時私は「おれが子どもたちに苦しめられ悩ませられて苦労しているのに、なぜそんなことを先生はおっしゃるのか、さっぱりわからん」と内心反発心で一杯でした。

二年前、私は深く落ち込みました。頼まれていた大事なご法話にもいけないことになりました。心療内科にいくと双極性のうつ病であるとの診断に大きなショックを受けました。私にとって法話だけは世間でも通用すると自負していたことでした。毎日、落とされ、落とされの日々でした。そういう中で母との出遇い、「弥陀の本願念仏をたのむ」ということが私に発起したのです。お念仏に救うて頂いている事実から申しますと、私自身が世間の価値から落ちこぼれた底下の凡愚に成らされたのです。しかし、お浄土の救いがあるから有難いのです。少年院の青年たちと心が通じるのはそれがあるからだと思います。こういう目に遇っていないと私はどこまでもうぬぼれが強く、高い所から人を見下している事実に気づくことなく、念仏をたのんだつもりになって勉強した仏法用語をふりかざして威張って一生をむなしくごした人間にちがいないです。

九月八日の超願寺さんのご法座で「底下の凡愚、とはどういうことですか」というご質問がありました。浄土真宗の救いとは決して高い所にはありません。

正法の時機とおもへども

　　　底下の凡愚となれる身は

　　　清浄真実のこころなし

いかがせん

　私には菩提心を起す心は無かったのです。菩提心を起して良い先生について一生懸命に勉強し聞法したら立派な人間に成れる、世間でいい位置につけると無意識に長い間私は思って来ました。阿弥陀様をたのむではなく、反対の自分の思いと努力心をたのんできたのです。など思いもしないことだったのです。他力の勉強をしながら、真宗の言葉や理屈を覚えながら自力聖道門の立場に何の疑いもなく立っていたのです。不安があり、苦しかったはずなのです。その事実に気づかそう、目覚めさそうとして、子どもや親、妻、一切の事の背後に弥陀のご本願がいていたのです。私は落とされまいと一生懸命に自分を守り、如来様に抵抗していたのです。如来様は見捨てずに智慧で照らし、大悲をそそぎ続けて下さっていたのです。先生の「えた児から食を奪い、耕夫からを奪う。そこに仏の慈悲がある」という言葉に、疑問と同時に何か魅かれるものを感じたのはこのことだったのです。底下の世界こそ、仏凡一体の広大なるお浄土の救いがあったのです。

さて、九月七日の西川先生宅のご法座において先生からご指摘がありました。通信二十九号の二頁、西川先生が「天地が飾られている」と言われたというところの、「飾る」という字は間違いである、「にはいのちがはいっている」とのこと、まことに人間ののついた世界と浄土荘厳のの入った世界とはまるで次元が違う世界でした。訂正させて頂きます。

　二十九号へのお便りは少なかったです。難しい内容だったのでしょうか。その中で励まされる方を紹介させて頂きます。

　さて、今般通信二十九号を拝読させて頂きました。先生のご体験からにじみ出た内容を有り難く味わわせていただきました。

その中でもとくに「あなた自身が本当に救われなさい」という大石先生の言葉が公案のように響いてまいりました。摂取の光明に包まれていながらそれに頷けない自分、白隠禅師の座禅和讃に「たとえば水の中にいて渇きを叫ぶがごとくなり」と示されている自分を指摘していただきました。どうも有難うございました。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　高岡市　　高井　外次

　高井さんとのご因縁はドラマチックでした。オウム真理教の事件があった年の冬、能登半島の氷見の駅のベンチに私はいました。安専寺さんの報恩講のお招きを受けて、駅で住職さんの迎えの車を待っていました。実は大分を出発する前日に夫婦喧嘩をしていました解決のつかないまま、せっかくの報恩講のご縁なのに怒りが取れないとに暮れていたのでした。品の良い警察官の方が来るなと思っていたら、私に職務質問がはじまりました。どこから来たのか、職業は何か、どのような用事か。私が浄土真宗の僧侶であることがわかり、お試しの質問をされました。「口に称える禅、座る念仏と聞いたがあなたはどう思われるか」

私はどう答えたのか覚えていません。ただ「そのような良い質問をよくしてくださいました」と大変よろこんだそうです。翌年から年賀状のやり取りが始まりました。退職されてからは本願寺派の中央仏教学院で学ばれ、超願寺さんの法座には欠かさずにお参り下さっています。

　次の方は二年前にご主人の満中陰の日に息子さんを亡くされた広島の水野さんです。

　　長仁寺様

　　　このところ、朝、戸を開けた途端にさわやかな秋の気配が感じられほっとしています。あまりの暑さに元気を自慢にしていた私でも少々こたえました。なかなかお礼状を書けなくて申し訳ありませんでした。

　　　通信二十九号、益々、文、信。両面深く、深くなられ、大石先生を思わされます。

　　並々ならぬご苦労故ご体験を通しての信の世界。それをばせて頂けるので、余計心に響き、信のお念仏が何時、どこでも口に出て下さいます。

　　　仏法の教えが先生の生活を通して届けて下さること、生かされる力を頂きます。日常に湧いてくる、喜怒哀楽を仏法の教えに照らして学ばせて頂く事、有難いです。

　　　けちゃだめだ、呆けないようこころがけなくてはと思うのですが‥‥どうしたらよろしいのでしょうか。

　　　お嫁さんはやさしいし、いまのところ身体は健康だし。有難いです。もったいないです。

　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　広島県安芸高田市　　　　　　水野　ウタ子

大石先生がご書信をお母様に送られるとすぐにお母さまから尊いおはがきが先生のもとへ届きました。先生はどれだけうれしく励まされたか知れません。水野さんからのお便りを

縁として私はいつもそのことを味わわせて頂いています。

　けはせんかという煩悩、死にはせんかという煩悩。大石先生は「死にたくないという

煩悩があるから助かる」とおおせられました。煩悩具足の凡夫にかけられたご本願がある

からです。炭が無ければ火は燃え移っていきません。煩悩がある間は火は燃え続けていく

のです。煩悩即菩提。生老病死即涅槃。煩悩があるから菩提心に転ぜられるのです。その

菩提心は浄土の大菩提心であります。浄土へ転じられるのは人間の力ではありません。不

退転は仏様、法蔵菩薩様のおはたらきです。

親鸞様は

　いかににふけり、道をおこたっても退転しない。～～～本願他力の御もよおしによって迷いの海に沈んでいる十方の衆生が一度この他力の行信に帰命したてまつれば、如来は直ちにみそなわして摂取して捨てたまわず。すなわちこれによりちに不退転の位に住せしめてくださる。このめ助けたまういわれが阿弥陀仏の四字である。これを願力他力というのである。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　聖典１９０頁

とのお教えであります。一度救われたらもう終わりではありません。煩悩具足の凡夫の身

であります。未完成であります。しかし、一念帰命の後は煩悩があっても前進があります。深まりがあります。私は如来様をわすれていつのまにか人に教え得る立場に立っています。それだからでしょうか、次々と如来様からのおためしがあります。毎日、しい煩悩と本願力がすべてのいのちに平等に与えられています。「煩悩も如来様が起こして下さる」とは西川先生のお教えであります。「天地がお内仏であり、お内仏の中住まいである」と大石先生が教えて下さいました。お念仏の中の生活を味わわされます。

令和元年（２０１９）十月六日

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　常照

なお、通信が押し付けになっていないか気になって来ました。遠慮はいりません。不要

の方ははがき等でおしらせ下さい。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　合掌